

おばあちゃんの農業をマネジメントする。

1120342 幾井 将史

高知工科大学マネジメント学部

1 概要

農業白書によると、日本が平成 11 年に「食料の安定供給の確保」、「多目的機能の十分な発揮」、「農業の持続的発展」の基本理念を掲げた食料・農業・農村基本法が制定されて 10 年の月日が経過した。しかし、食料自給率の低迷、消費者の食に対する信頼の低下、農業所得減少、農業者や農地の減少、農村の活力低下等、農業・農村では厳しい現状におかれている。

高知県の農家にスポットを当て、日本の農家の縮図と捉え、本当に厳しい現状に陥っているのか調査し、将来どのような農業の形が望ましいのか答えを導いていく。そのためには、質的調査により「現場」のリアルな事情を細かい部分まで調査し、その問題解決策を考え、農業者が満足いく、今後の農業の在り方について考えた。

2 背景

農村では、若者が都市へ移り住み、人口減少と高齢化が進行している。平成 17 年には、総人口に占める農村人口の割合は 34% まで低下し、農村における 65 歳以上の者の割合は 24% まで上昇しており、深刻な高齢化が進んでいる。

農産物の価格低下により農業所得減少に繋がる。その要因として、基幹的農業従事者数、耕地面積の減少、耕地利用率も低下し、国内の食料供給力が脆弱化したことが挙げられる。平成 2 年度をピークにコメを中心に農業生産額は減少傾向になり、農業所得（農業純生産）も平成 19 年度には平成 2 年度に比べると半減している。

3 目的

コンパクトで個人ベースの農家の実態を明らかにし、若者が継ぎたい、新規参入したいと思える農業の在り方を目指し、問題解決策を提案する。

4 研究方法

質的研究方法である「エスノグラフィー」を通して、おばあちゃん（定義: 集落において、65 歳以上で 1.5ha 以下の耕地面積を持つ農業者）の農業を探る。エスノグラフィーとは、「異文化」、「他者」、「別世界」を理解する方法として発展してきた研究であり、人間・心・社会・などについて数字ではなく、言葉や映像を用いて研究することである。

5 結果

高知県の石田幸子さん（78、仮名）の農業生活に密着した。香美市楠目の^{あぶらいし}油石と呼ばれる集落に住んでおり、その地でメインの農作物をコメとし、サブの農作物として野菜や柑橘類、お茶などを育てている。夫（83）は体力の限界を感じ、農業を引退している。そのため、今は自営業をしている息子（50）が田植え、稲刈りなど労力がある時期だけ副業として手伝いをしている。販売チャネルは個人販売、JA、スーパー、野菜市場である。5a ほどの野菜畑には 12 種類の野菜を育てており、ほとんどは自宅で消費し、余った分を出荷や近所に配るなどしていた。

田圃周辺の草刈り作業では、斜面で 5kg の草刈り機を使うため重労働であり、体力を必要とする。

年末に近づくとお世話になった人へお歳暮として「手作りこんにやく」を自分の手で届ける。また保存食として、大根を加工し漬物にするが、商品として売り出すのではなく、コメ買ってくれる顧客に贈る、集落住民に贈る、自宅で食べるために作っている。

昔は、集落のほとんどが農家をしており、モノが少ない時代に、助け合いの精神で農業を営んできた。それが今の集落活動の歴史である。現在も、集落で集まる機会は存在し、お祭りや宴会をして地域のネットワークを築いている。幸子さんは料理が得意であり、集落の宴会時には料理の指揮をとり、活動の一部の重要な役割を果たしている。集落の中で農業をする者にとって集落活動は「情報交換」のコミュニティの場であった。

6 考察

おばあちゃんにとって農業は、生活の基盤であることが分かった。農業を通じて趣味が生まれその趣味が結果として、集落のネットワークを構築する材料になっている。「農業」と「趣味」と「集落活動」が連動し、おばあちゃんの農業を形成している。「農業」を基盤に地域の人と人を繋げている集落活動の維持がこれからの農業を継続させ、集落の風景を守ることに繋がる。これらの関係性が判明し、これから集落活動の維持が必要であると考えた。若者が農業を副業ですか、或いは引き継がないため集落活動の参加が消極的であり、引き継ぎが難しいことが判明した。また兼業農家が多い理由として、親がまだ農業ができる状況であること（人手が足りる）、専業

農家ではリスクが大きいと、失敗を恐れている。今まで親がしていた農業では通用しない時代になっているため、新しいことに挑戦しなければならないと感じた。

7 提案

集落活動維持のために、①集落全員に「限界集落」の危機にあることを伝える②地域愛・郷土愛があるかないかの調査を行う③この集落独自の「良さ」を再確認・発見してもらう。④集落のネットワークの重要性について知ってもらう。⑤高齢者（先輩）を交え、この集落の未来を一緒に考えてもらう。

地域愛・郷土愛が無い場合、「誇り」を持ってもらうために、①地域点検マップづくり（地域を歩く）②課題の整理と共有化③地域の将来像を描く④地域内での中間報告会の開催⑤目標・プランを立てる⑥活動のスケジュールを立てる⑦実践する

集落にマッチした地域再生計画案を作成する。筆者は集落の宝を“おばあちゃん力”だと思っている。おばあちゃんの料理教室を開き、集落住民に参加してもらい、家で取れた野菜を使って、一緒に料理をすることで集落の持っている「良さ」を感じてもらう。将来的には、6次産業を意識した「農業レストラン」を作り、“おばあちゃん力”を活かしたビジネスを展開する。

兼業農家から専業農業にシフトしてもらうために、小規模農業でコスト削減型農業をし、失敗しても致命的なダメージを負わない経営モデルにする。JAやスーパーは作物の外観を重視するため、余計な費用が作物にかかってしまうので、「道の駅」や「直販店」に出荷する。

参考文献

- [1] 「平成 21 年度 食料・農業・農村の動向」 概要（農村白書）第一章。
- [2] 小田博志(2010)「エスノグラフィー入門＜現場＞を質的研究する」出版社 新春社。
- [3] 小田切徳美（2009年）農山村再生「限界集落」問題を超越。 出版社岩波書店。
- [4] 杉山径昌（2006年）農！黄金のスマールビジネス。発行所 築地書館株式会社。
- [5] 農林水産省ホームページ。「農家に関する統計」(<http://www.maff.go.jp/j/tokei/sihyo/data/07.html>)